

一つの論争への誘い — 「はじめに」に代えて —

安彦一恵

本号所収の林誓雄、佐藤岳詩氏による二つの「リプライ」論稿は、筆者の次の「コメント」稿に対するものである。

「「道徳性」について：『倫理学年報』第58集（2009年）三論稿への書評」（『dialogica』no. 12.91 : http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e_ph/dia/1291.html）

「「道徳心理学」への誘い — 「「道徳性」について：『倫理学年報』第58集（2009年）三論稿への書評」への補遺 —」（『dialogica』no. 12.92 : http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e_ph/dia/1292.html）

一読させて頂いた限りでは、私のコメントに対する丁寧な回答という印象をもつ。しかし、コメントにおける私の意図は — 第二のものに記したように — 「道徳心理学的論争への誘い」であったが、両「リプライ」は、その「誘い」への“反応”の点では不十分であったと思う。この点は私のいわば仕掛けの“失敗”であった。しかしながら、それは或る種必然であったとも言う。両氏は共に、（元稿の）基本スタンスとしては — 日本の倫理学研究の或る種“慣習”に従って — 学説解釈に定位されていた。林氏はヒュームの、佐藤氏はヘアの、それぞれ自前の解釈を提示することを目的とされていた。私はここをいわば無理に噛み合わせようとしたのである。

しかし他方、林氏はヒュームを、佐藤氏はヘアを通して、それぞれ「道徳」（という事象）をターゲットにされていたはずである。それぞれ「道徳」事象の解明を求めて、ヒューム、ヘアに着目されたはずである。（この点から言うなら、「なぜヒュームか」「なぜヘアか」という問いを私は暗黙には込めていたのである。）期待したのは、この次元にそれぞれ立たれていることの弁明を含むかたちでの「リプライ」であった。

今回は「リプライ」が頂けなかった『倫理学年報』児玉論稿は（規範倫理的に明瞭に功利主義を採っておられていて、その立場からの）「道徳」事象の論であった。たとえばより適切なベンサム解釈を目指すというものではなかった。この点で、児玉リプライは

我々が求めるところに直接に“反応”するものであろうことを期待していた。氏からは、「今回は出来ないが、いずれ」という趣旨の連絡を頂いている。来年度にも期待できる氏の論戦“参入”を待ちつつ、今後、三氏間で — あるいは、私のものも含めて他の論稿でも（日本の）論者への若干の言及も在るが、それらの方々からのものも含めて、あるいはさらに、本記事執筆直前に「ヒューム研究会」（9月7日）での中村隆文氏の報告原稿「ヒューム情念論再考 — 道徳的行為へとわれわれを動機づける「理由」はどこにあるのか？ — 」を入手したが、中村氏など問題関心を共有する研究者達をも含めて — 事柄をめぐって活発な論争が — 私としては道徳心理学的論点のものであって欲しいのだが、必ずしもそれに限定されなくてもいいと思う。しかし、いわば（たとえばヒューム業界という）業界内部的な（解釈）論争は必然的に超えられることになると思う — 展開されることを期待したい。それは、本誌がそのタイトルで明示しているように、とりわけ哲学系の学の展開には対論が必要である — 欧米の学界に比べて日本ではそれが決定的に欠けているとも見ている — と考えているからでもある。